『源氏物語』「蓬生」の巻現代語訳試案（二）

室城秀之
大津直子
西口あや
秋草まゆみ
蔡芸

【五】乳母子侍従、ならびに叔母の動向

担当：大津　直子

侍従などいひし御乳母子のみこそ、年ごろ、あくがれ果てぬ者にて候ひつれど、通ひ参りし斎院失せ給ひなどして、いと堪へがたく心細きに、この姫君の母北の方のはらから、世に落ちぶれて受領の北の方になり給へるありけり、娘どもかしづきて、よろしき若人どもも、「むげに知らぬ所よりは、親どももまうで通ひしを」と思ひて、時々行き通ふ。この姫君は、

侍従などといった姫君の乳母子ばかりは、長年、お暇を戴くようなこともせずに寄り添っていたのだが、奉公に通っていた斎院がお亡くなりになったりなどして、ひどく耐えがたいほど心細く思っていたところに、この姫君の母常陸宮の北の方の妹君で、宮家の出自もむなしく受領の北の方に収まられた方が現れたのだった。娘たちを大切に養育していたので、侍従

かく人疎き御癖なれば、むつましくも言ひ通ひ給はず。「おのれをば貶め給ひて、面伏せに思したりしかば、姫君の御ありさまの心苦しげなるも、え訪ひ聞こえず」など、なま憎げなる言葉ども言ひ聞かせつつ、時々聞こえけり。

もとよりありつきたる、さやうの並々の人は、なかなか、よき人のまねに心を繕ひ、思ひ上がるも多かるを、やむごとなき筋ながらも、かうまで落つべき宿世ありければにや、心少しなほなほしき御叔母にぞありける。「わが、かくと難のない若女房らの幾人とは一緒に、「むやみに知らぬところよりは、親の代も出入りさせていただいていたのだから」と思って、時々行き来をしている。この姫君は、このように人慣れしないご性分なので、睦まじく御手紙のやり取りもなさらない。北の方は、「姉上はこの私をおとしめなさって、私のことを宮家の面汚しとお思いだったのだから、姫君のお暮らし向きがおいたわしい状態であっても、お尋ねすることもかなわない」などと、小憎たらしい言葉を

劣りのさまにて、侮らはしく思はれたりしを、いかで、かかる世の末に、この君を、わが娘どもの使ひ人になしてしかな。心ばせなどの古びたる方こそあれ、いと後ろやすき後見ならむ」と思ひて、「時々ここに渡らせ給ひて。御琴の音も承らまほしがる人なむ侍る」と聞こえけり。この侍従も、常に言ひ催せど、人に挑む心にはあらで、ただこちたき御物慎みなれば、さもむつび給はぬを、ねたしとなむ思ひける。

言い聞かせながら、時折お便りを差し上げるのだった。

もともと受領階級に生まれついた並みの身分の人はかえって、良い身分の人のまねをして気取って気位を高く持ったりする者も多いのだが、高貴な血筋ながらもここまで落ちぶれるはずの因縁があったせいか、心根がやや卑しい叔母君であられる。「私がこのように劣った様で、軽んじて見られてきたのだから、どうにかしてこのような宮家の末路にこの姫君を我が娘たちの使用人にしたいものだ。考え方など、古めかしいような点はともかくとして、とても安心な後盾だろう」と思って、「時々こちらにおこし下さいな。あなたさまの琴の音色を拝聴したがっている人がおります」と申し上げたのだった。この侍従も常日頃姫君におすすめするが、姫君は人に逆らおうという心情ではなく、ただ並外れた引っ込み思案であるゆえその通りにも親しくなさらないのを、

叔母は、腹立たしいとばかり思っていたのだった。

【「時々行き通ふ」のは誰か】

本節の冒頭では末摘花の乳母子、侍従の動静が語り起こされる。常陸の宮邸以外、斎院の邸に奉公に上がっていたことは、「末摘花」巻にも描かれていた。大事な奉公先のあるじが亡くなったことによって、いよいよ侍従の暮らしも貧しくなる。ここに、末摘花の叔母が登場してくる。受領階級に身を落し、生前父親や末摘花の母である姉に軽蔑されていた叔母であった。彼女には何人もの娘がいて、養育に心血を注いでいる。侍従は渡りに船といった風に叔母の家を新しい奉公先として時折顔を出すようになる。このあたりの文脈は、侍従、叔母、辛うじて残っていた若女房たちへと視点が次々と移ってゆく。訳出する場合、一頁上段最後の「時々行き通ふ」のは誰であるのかが問題となる。「世に落ちぶれて受領の北の方になり給へるありけり」は通常挿入句と解される〈新全集頭注〉が、ひとまず文を終止させた。問題は、次の「娘どもかしづきて、よろしき若人どもも、」という部分である。河内本は「わか人とゝもゝとむるに」となっており、叔母から侍従へという主語の転換が明らかである。しかし、本研究会での議論を経た上で、この度は、青表紙本に従い侍従に加えて若い女房数名も、叔母の家に通うようになったと解釈した。ただし、やはり解釈の難しい箇所である。

【六】末摘花への憎悪を募らせる大弐の北の方

担当：西口　あや

かかるほどに、かの家あるじ、大弐になりぬ。娘どもあるべきさまに見置きて下りなむとす。この君をなほも誘はむの心深くて、「遥かにかくまかりなむとするに、心細き御ありさまの、常にしも訪ひ聞こえねど、近き頼み侍りつるほどこそあれ、いとあはれに後ろめたなくなむ」など言よがるを、さらに承け引き給はねば、「あな憎。ことことしや。心一つに思し上がるとも、さる藪原に年経給ふ人を、大将殿も、やむごとなくしも思ひ聞こえ給はじ」など怨じうけひけり。

さるほどに、げに、世の中に許され給ひて、都に帰り給ふと、天の下の喜びにて立ち騒ぐ。「我も、いかで、人より前に、深き心ざしを御覧ぜられむ」とのみ思ひ競ふ男女につけて、高きをも下れるをも、人の心ばへを見給ふに、あはれに思し知ること、さまざまなり。かやうに慌たたしきほどに、さらに思ひ出で給ふ気色見えで、月日経ぬ。

「今は限りなりけり。年ごろ、あらぬさまなる御さまを、悲しいみじきことを思ひながらも、萌え出づる春にあひ給はなむと念じわたりつれど、礫瓦などまで喜び思ふなる御位改まりなどするを、よそにのみ聞くべきなりけり。悲しかりし折の憂はしさは、ただ、わが身一つのためになれるとおぼえし、効なき世かな」と、心砕けて、つらく悲しければ、人知れず音をのみ泣き給ふ。

大弐の北の方、「されば よ。まさに、かくたづきなく人悪き御ありさまを、数まへ給ふ人はありなむや。仏、聖も、罪軽きをこそ導きよくし給ふなれ。かかる御ありさまにて、猛く世を思し、宮、上などのおはせし時のままに馴らひ給へる御心驕りのいとほしきこと」と、いとどをこがましげに思ひて、こうしているうちに、その叔母の夫が太宰大弐に任ぜられた。娘たちをしかるべく縁づけておいて、任国に下ろうとする。叔母は、それでもまだ、「姫君を連れていこう」と執念深く思っていて、「遠くへ赴任することになりましたので、いつもお見舞いしていたわけではございませんが、お近くにいて安心である間ならともかく、あなたの心細いご様子が、大変可哀想で気がかりでなりません」と言葉巧みに言うのを、姫君はまったく応じようとしないので、叔母は、「まあ憎らしい。ご大層なこと。ご自分だけでお高くとまっていらしても、あんな藪原に長年住んでいらっしゃる人を、大将殿も決して大切にはお思いにならないでしょう」などと怨んだり呪ったりするのであった。

そのうちに、果たして光源氏が世間に許されなさって、都にお帰りになるということで、人々は天下の喜びとして大騒ぎする。人々が、「何とかして光源氏さまに他人より先に深い誠意をご覧いただこう」と競うにつけても、光源氏は、身分の貴賤を問わず、人の心のあり方をご覧になり、しみじみと胸中で思うことが様々ある。このように慌ただしくしているうちに、光源氏は姫君をまったく思い出しになるご様子もないままに、月日が過ぎた。

姫君は、「光源氏さまとのご縁ももう終わりなのだ。長い間、光源氏さまの本来と違うご様子を、悲しくつらいことと思いながらも、『草木の萌え立つ春に巡り合っていただきたい』と祈り続けてきたけれど、下賤な者までが喜ばしく思う光源氏さまの昇進などを、無縁のこととして聞かなければならないのだ。光源氏さまが須磨に退去した時の嘆かしさは、自分一人の身のために起こったのだと思わ

「なほ思ほし立ちね。世の憂き時は、見えぬ山路をこそは尋ぬなれ。田舎などはむつかしきものと思しやるらめど、ひたぶるに人悪げには、よもてなし聞こえじ」など、いと言よく言へば、むげに屈じにたる女ばら、「さも靡き給はなむ。猛きこともあるまじき御身を、いかに思して、かく立てたる御心ならむ」ともどきつぶやく。

れたのに、私たちは取るに足らない仲であったのか」と、すっかり気落ちして悲しく思い、人知れず泣きに泣いていらっしゃる。

大弐の北の方は、「それ見たことか。どうして、このように頼りにするところもなく、みっともないご様子であるのを、人並みに扱ってくださる方がいるものですか。仏や聖でも、罪の軽い者こそよく導いてくださるというではないか。このようなご様子で、偉そうに世間を見下して、故常陸宮や母上などがご存命でいらした時のままに振る舞っていらっしゃる傲慢さが気の毒なこと」と、いっそう姫君を愚かしく思って、「やはりご決心なされ。世の中がつらく感じられる時は、古歌にもあるように、見えぬ山路をも尋ね入るものだそうです。田舎などは恐ろしいものと想像なさるかもしれませんが、むやみに見苦しいようにはよもや扱い申さぬつもりです」などと実に言葉巧みに言うので、すっかり元気をなくしている女房たちは、「叔母君のおっしゃるとおりになさればいいのに。たいしたこともなさそうな身の上を、どのようにお思いになって、こう意地をお張りになるのでしょう」とぶつぶつ言い合っている。

【末摘花の籠絡を目論む大弐の北の方】

大弐の北の方は、自身が受領のもとへ嫁いだため、宮家から侮蔑されてきたという恨みを抱いている。そして、その恨みを、末摘花を虐げることで晴らそうと躍起になっているのである。

以前は、末摘花を、「わがむすめどもの使ひ人になしてしがな」（〈新全集〉二巻・三三三頁）と、娘たちの使用人にしようと目論んでいる様子が描かれていたが、ここでは、「娘どもあるべきさまに見置きて下りなむとす」、つまり、娘たちをしかるべく縁づけようとしていることが記されている。それでもなお、「なほも誘はむの心深くて」と、末摘花を共に太宰府へと連れて行こうとしているところからも、大弐の北の方の執心ぶりが窺える。末摘花を、今以上に落ちぶれさせようと画策しているのである。その点や、強制的であることを明確に示すため、現代語訳では、「誘はむ」を「連れていこう」とした。

大弐の北の方の言葉で、「遥かにかくまかりなむとするに、心細き御ありさまの、常にしも訪ひ聞こえねど、近き頼み侍りつるほどこそあれ、いとあはれに後ろめたなくなむ」とある。思惑を隠して、表面上は同情しているように見せかけて、末摘花の首を何とか縦に振らせようと、巧

みに呼びかける言葉である。前から読んでいくと、非常に理解しづらい。そこで、ここでは、「常にしも訪ひ聞こえねど、近き頼み侍りつるほどこそあれ」を、挿入句として捉えた。現代語訳に訳す際は、「遠くへ赴任することになりましたので、あなたの心細いご様子が、大変可哀想で気がかりでなりません」という訳に、「いつもお見舞いしていたわけではございませんが、お近くにいて安心である間ならともかく」と挟み込む形をとった。

【憎悪を増長させる大弐の北の方】

しかし、末摘花が誘いを受け入れないため、大弐の北の方の復讐心はますます煽られていく。大弐の北の方は、「さる藪原に年経給ふ人を、大将殿もやむごとなくしも思ひ聞こえ給はじ」と、末摘花を恨み、呪っている。末摘花の荒廃した住まいを「藪原」と呼んで貶め、この時は無位無官となっている光源氏を、あえて「大将殿」と呼んでいる。この点については、〈評釈〉では、「ここで大将殿と言ったのは今までの習慣であろう。あるいはまた、無位無官の人を頼りとする姫を嘲笑する気でもあるのであろうか」と考察されている。

光源氏は、帰京しても、いっこうに末摘花のもとを訪れない。それに落胆する末摘花を見て、大弐の北の方は、末摘花をますます愚かしく思う。大弐の北の方の、「どうして、このように……」という考えは、光源氏に忘れ去られた末摘花の惨めな現状を浮き彫りにしている。常陸宮家の末裔として、誇り高くあろうとする末摘花の姿は、大弐の北の方の目には、「猛く世を思し、宮、上などのおはせし時のままに馴らひ給へる御心驕りのいとほしきこと」としか映っていない。大弐の北の方は、末摘花に対して、はなから悪感情しか抱いていないのだから当然といえよう。末摘花を罪業ある者として捉えており、「いとどをこがましげに思ひて」の「いとど」、つまり「いっそう」という言葉からは、ここに来て、北の方の末摘花に対する悪感情が、以前に増して高まっていることが表されている。大弐の北の方が予見していたことがすべて現実となりつつあるというのに、末摘花は頑として自分に従おうとしない。こんな悲惨極まる状態になっても、自らの思い通りにならない末摘花に対して、大弐の北の方の苛立ちが募っていることが窺えよう。

大弐の北の方は、今度は女房たちを取り込もうと巧妙に働きかける。「世の憂き時は、見えぬ山路をこそは尋ぬなれ」については、〈評釈〉〈集成〉〈新大系〉〈新全集〉すべてに引き歌の指摘がされている。文体の流麗さを維持するためにも、引き歌があることについては触れずに訳し、後に注で指摘をするか、引き歌があることを暗に示すために、「古歌にいう……」、「一般に……」などと訳すかは、判断に窮する。今回は、注を付していないため、「世の中がつらく感じられる時は、古歌にもあるように、見えぬ山路をも尋ね入るものだそうです」と訳した。

女房たちも、大弐の北の方の言葉を聞き、末摘花に対する不満を顕わにしていく。この場面では、光源氏に蔑ろにされて悲しみに沈む末摘花が、大弐の北の方の巧妙な遣り口によって、次第に追い詰められていくさまが描かれているのである。

【七】故常陸の宮邸の窮乏

担当：秋草　まゆみ

侍従も、かの大弐の甥だつ人語らひつきて、とどむべくもあらざ	侍従も、あの大弐の甥にあたる男が懇ろな仲になって、都に残し

りければ、心よりほかに出で立ちて、「見奉り置かむが、いと心苦しきを」とてそのかし聞こゆれど、なほ、かくかけ離れて久しうなり給ひぬる人に頼みをかけ給ふ。御心の内に、「さりとも、あり経ても思し出づるついであらじやは。あはれに心深き契りをし給ひしに、わが身は憂くて、かく忘られたるにこそあれ、風の伝てにても、我かくいみじきありさまを聞きつけ給はば、必ず訪ひ出で給ひてむ」と、年ごろ思しければ、おほかたの御家居も、ありしよりけにあさましけれど、わが心もて、はかなき御調度どもなども取り失はせ給はず、心強く同じさまにて念じ過ごし給ふなりけり。

音泣きがちに、いとど思し沈みたるは、ただ、山人の赤き木の実一つを顔に放たぬと見え給ふ御側目などは、おぼろけの人の見奉り許すべきにもあらずかし。くはしくは聞こえじ。いとほしう、物言ひさがなきやうなり。

ておいてくれそうになかったので、不本意ながら自分もいっしょに出立することになって、「後にお残しして行くのがとてもつらいので」と言って、下向を申し上げるけれど、やはり、こんなに訪れもないまま久しくおなりになった源氏の君に望みをかけていらっしゃる。お心のうちに、「いくらなんでも、このまま年月がたつうちには、いつか思い出しくださる折がないはずはない。しみじみと心深くお約束なさったのに、この身の運のつたなさから、このように忘れられているのだろうが、それでもいつかは風の便りにでも、自分がこうしたみじめな有様になっているのをお耳になさったら、必ずお訪ねくださるにちがいない」と、この幾年月思い続けていらっしゃったので、自分のお考えを持って、とりとめもない御調度のようなものでも失くさぬようになさって、心強く源氏の君がお訪ねになった時と同じように堪え忍んで月日をお過ごしになっているのだった。

声をあげて泣くことが多く、ますます悲しみに沈んでいらっしゃるお姿は、まさに山人が赤い木の実一つを顔につけて放さぬようにお見えになるその御横顔などは、ふつうの人なら拝見して耐えることの出来ないものであるよ。詳しくは申し上げないつもりだ。気の毒なことを言うのは意地が悪いようである。

【心強く同じさま】

光源氏の足が遠のいていることを自覚しながらも健気に待つ末摘花の様子が描かれる当該場面において本文「心強く同じさま」とは何を表しているのか考えたいと思う。心強くとは現代語にもみられる言葉であるが、心強くとはどのようなことを表すのだろうか。私は、「強く意志を持つ」ことや「心を強く保つ」ことを表現しているのではないかと考える。光源氏を一心に思い続ける末摘花の心情を表現しているのではないだろうか。そして、「同じさま」は末摘花の家屋の様子が昔と変わらぬ様子も同時に示しているのだろう。「はかなき御調度」も「取り失はせ給はず」にと書かれていることからも推測される。末摘花に必要のない男性用のものが残されていることから、光源氏を変わらない思いで待ち望んでいたことがわかる。調度品を心の頼りとして変わらない様子で光源氏を待つという意思が感じられる。このように、右のことから、「心

強く同じさま」には光源氏を変わらずに待つ末摘花の心と末摘花の屋敷の変わらぬ様子どちらもの意味がこめられているのだろう。

【八】二条院の御八講

担当：蔡　芸

冬になりゆくままに、いとどかきつかむ方なく、悲しげに眺め過ごし給ふ。かの殿には、故院の御料の御八講、世の中揺すりてし給ふ。ことに、僧などは、なべてのは召さず、才すぐれ行ひに染み、尊き限りを選らせ給ひければ、この禅師の君参り給へりけり。

帰りざまに立ち寄り給ひて、「しかしか。権大納言殿の御八講に参りて侍るなり。いとかしこう、生ける浄土の飾りに劣らず、厳めしうおもしろきことどもの限りをなむし給ひつる。仏菩薩の変化の身にこそものし給ふめれ。五つの濁り深き世に、などて生まれ給ひけむ」と言ひて、やがて出で給ひぬ。

言少なに、世の人に似ぬ御あはひにて、効なき世の物語をだにえ聞こえ合はせ給はず。「さても、かばかりつたなき身のありさまを、あはれにおぼつかなくて過ぐし給ふは、心憂の仏菩薩や」と、つらうおぼゆるを、「げに、限りなめり」と、やうやう思ひなり給ふに、大弐の北の方、にはかに来たり。

冬になってゆくにつれて、いっそう頼りになる人もなくなり、末摘花は悲しそうにもの思いに沈んでお過ごしになる。光源氏のお邸に、桐壺院の御ために御八講を世間も大騒ぎして行われる。とりわけ僧侶などは、並々のはお呼びにならず、学才に秀で修行を積み、高徳の方を全部お選びあそばしたので、姫君の兄の禅師の君もお参りになるのであった。帰りの時、末摘花のもとにお立ち寄りになって、「これこれ。権大納言殿（源氏）の御八講に参上しておりましたのです。真実な尊い極楽浄土の荘厳にも負けず、厳かである趣向の限りを尽くして行いなさいました。仏、菩薩の変身であられるのでしょう。光源氏はどうして五濁悪世にお生まれになったのでしょうか」と言って、そのままさっさとお帰りになった。

余計なことを語らず、世間の普通な人と違う御兄妹は、ちょっとした世間話さえもなさらなかった。姫君は、「これほど不遇な私の境遇を、可哀そうなままにほっておかれるとは、光源氏さまは何とも思いやりのない仏、菩薩よ」と恨めしくお思いになるので、「いかにも光源氏さまとのご縁がおしまいのであるようだ」とだんだんにお考えになっている時に、大弐の北の方が突然やってきた。

【「仏菩薩の変化の身」と「心憂の仏菩薩や」】

この段落では、光源氏は故桐壺帝のために、二条の院で盛大な御八講が行われた。末摘花の兄の禅師の君は、光源氏の御八講に参加して、帰る際に、末摘花を訪れた。この兄妹の話の中に、「浄土」、「仏菩薩」の表現何度か出ている。まず、禅師の君は御八講の状況を話した時、「生ける浄土の飾りに劣らず」と言った。「生ける」という言葉を使っている。これは、二条の院の御八講は、真実な尊い極楽浄土の荘厳にも負けずの意味として適切だと思う。同じような表現は「初音」の巻で、「生ける仏の御国とおぼゆ」とも出て来る。さらに、光源氏のことについて、

禅師の君は「仏菩薩の変化の身」と表現して、「光源氏さまはどうして五濁悪世にお生まれになったのでしょうか」と感嘆した。金小英氏は、『源氏物語』の中で、光源氏を「仏」と比喩している場面は五ヶ所あると指摘している。当該場面はその一つである。禅師の君は、久しぶりに会った妹に挨拶の言葉もなくて、光源氏を賛美して、そのままに帰った。語り手も、禅師の君と末摘花は「世の人に似ぬ御あはひにて」と、不思議な兄妹と評価した。そして、苦しい末摘花は心内に、「これほど不遇な私の境遇を、可哀そうなままにほっておかれるとは、光源氏さまは何とも思いやりのない仏、菩薩よ」と、光源氏を恨んだ。面白いのは、禅師の君の賛美の気持ちが溢れている「仏菩薩の変化の身」と違って、末摘花の「仏菩薩」は複雑な感情を含めていることである。光源氏は都に戻ってから常陸の宮の邸に一回も通っていなかった。末摘花は、光源氏がいつか自分のことを思い出すことを信じている。しかし、兄の言葉は、自分の夢を破った。貧しくて寂しく暮らしている自分と違って、もう権大納言に昇進した光源氏は極楽浄土の二条の院に住んでいる。さらに、禅師の君の言葉から見ると、光源氏が自分のことを忘れている可能性が高かった。だから、末摘花は、光源氏のことを「心憂の仏菩薩や」と思った。「恋人」の光源氏に振られ、唯一の兄にも頼れなかった。末摘花の心内をよく理解した上で、この段落を訳をした。

注

(1) 金小英『源氏物語』における「女」と「仏」――若紫巻の喩としての「仏」を中心に――」(「早稲田大学大学院文学研究科紀要」第三分冊二〇一〇年二月二〇日)